



Data

監督・製作：マイケル・グランデー
ジ

脚本・製作：ジョン・ローガン

原作：A・スコット・バーグ『名編集者パーキンズ』（草思社刊）

出演：コリン・ファース／ジュード・ロウ／ニコール・キッドマン／ローラ・リニー／ガイ・ピアース／ドミニク・ウエスト

👁️👁️ みどころ

あなたは将来どんな仕事に就きたいですか？政治家、弁護士の人気は近時下降気味だが、スポーツ選手と共にピアニストや作家は大人気！もっとも、それには才能と努力が不可欠だから大変だ。就活にうつつを抜かずレベルなら、平社員（貝社員？）がせいぜい……。そこで「編集者！」と挙げる人は一人もいないはずだ。

しかして、1920年代のアメリカに現実に存在したカリスマ編集者パーキンズとは？「削れ！」「削れ！」をめぐる作家と編集者との命を賭けた格闘は興味深い。これまで映画では描かれなかったそんな世界をしっかりと鑑賞したい。

ちなみに、本作の鑑賞については、活字不況、本離れ時代の現在の日本でもミリオンセラーの出版を続けている幻冬舎のカリスマ編集者・見城徹氏の生きざまと対比させるのも一興だろう。

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■こんな作家を知ってる？こんな編集者は？■□■

私は大学時代の英語の授業で『ライ麦畑でつかまえて』（51年）を教科書に指定されたことによって、1950年代のアメリカにJ・D・サリンジャーという、ケツタイだが有名な作家がいたことをはじめて知った。もちろん授業はロクに受けていないからまともに読んでいないが、その中でさかんに「Son of a bitch！（ろくでなし!）」という汚い言葉が使われていることにビックリしたことだけはよく覚えている。

本作は事前情報がほとんどなかったので、「編集者パーキンズ」なる人物のことは全く知

らなかった。また、原題の『GENIUS』（天才、守り神）を見ても、本作の主人公がアーネスト・ヘミングウェイやF・スコット・フィッツジェラルドと並んでアメリカの1920年代を代表する有名な作家だということも、まったく知らなかった。さらに、本作が作家のトマス・ウルフ（ジュード・ロウ）と、その才能を見出しその編集者として心血を注いだマックス・パーキンズ（コリン・ファース）の激しくも美しい友情と対立の物語だということも知らなかった。

映画の鑑賞は勉強！私にとって本作の鑑賞はそんな動機にもとづくものだったが、実際に本作は極めて貴重な勉強のための一本になった。

■□■ひょっとしてノーベル文学賞もあり、だった？■□■

2016年のノーベル文学賞の選考で村上春樹氏はまたしても選出されず、何と『風に吹かれて』の曲で有名なアメリカの歌手ボブ・ディランが選出された。事前にわずかながら個人的親交のあった中国の莫言さんが2012年にノーベル文学賞を受賞した時は私も大いに喜んだが、今年もボブ・ディランの選出に私は大いに興奮させられた。音楽の歌詞が文学賞の対象になるのか否かの議論を含めて、これからしばらくは大いにノーベル文学賞の議論のテーマになるだろう。

『世界文学全集』に載っている作家、アーネスト・ヘミングウェイの名前は誰でも知っているし、私も若い時に『日はまた昇る』（26年）や『武器よさらば』（29年）、『誰がために鐘は鳴る』（40年）や『老人と海』（52年）は読んでいる。それに対してF・スコット・フィッツジェラルドという作家は全然知らなかったが、レオナルド・ディカプリオ主演の『華麗なるギャツビー』（13年）（『シネマルーム31』76頁参照）で俄然有名になったことによって、私もはじめて知った。ヘミングウェイは1954年にノーベル文学賞を受賞しているが、本作の一方の主人公になっている作家トマス・ウルフの作品は？

その代表作は『天使よ故郷を見よ』（29年）と『時と川の』（35年）の2作らしいが、私はそんなタイトルすら聞いたことがない。しかし、トマスは1938年に37歳で夭逝するまでアメリカで大変な人気を博し、両作品はベストセラーになったそうだから、そのうち書き続けていたら、ひょっとしてノーベル文学賞の受賞もありだったかも・・・？

■□■文章と表現があらわれ出すこの作家に注目！■□■

私はジュード・ロウをアカデミー賞とゴールデン・グローブ賞にノミネートされた『リプリー』（99年）で観たが、ニコール・キッドマンと共演した『コールドマウンテン』（03年）（『シネマルーム4』139頁参照）でハッキリその名前と顔を印象づけた。彼はその後『シャーロック・ホームズ』（09年）（『シネマルーム24』198頁参照）で少し路線変更をした（？）が、その後『ヒューゴの不思議な発明』（11年）（『シネマルーム28』15頁参照）、『アンナ・カレーニナ』（12年）（『シネマルーム30』105頁参照）、『サ

イド・エフェクト』(13年)、『シネマルーム31』218頁参照)、『グランド・ブダペスト・ホテル』(13年)、『シネマルーム33』17頁参照)等で名優としての地位をキープしている。

ジュード・ロウはどちらかというと端正で知的な役柄が似合うが、本作冒頭では雨の中を革靴を濡らしながら足踏みし、ニューヨークにあるスクリブナーズ出版社の編集長であるパーキンズに会いに行くについて、イライラしているトマスの姿が映し出される。その後、パーキンズが妻のルイズ(ローラ・リニー)と5人の娘たちとの家庭生活もそこに、原稿読みに集中する姿が映し出されることによってストーリーが少し転換した後、やっと2人のはじめての「ご対面」となる。パーキンズの部屋に入るなり、トマスが部屋の棚に飾られている本の数々を見て「傑作ばかりだ」とまくし立て、アーネスト・ヘミングウェイやF・スコット・フィッツジェラルドを発掘したスクリブナーズ出版社の編集者パーキンズに「会いたかった」とおべんちゃら(?)を並べ立てるのは、自分の持ち込み原稿についてパーキンズの口から「ボツ!」と言われるのを恐れているため。つまり、トマスがしゃべる前にパーキンズの口から「あなたの原稿を読ませていただきましたが・・・残念ながら・・・」と言われ始めると、これまで足繁く通った多くの出版社と同じようになることがトマスには目に見えているわけだ。しかし、パーキンズはここでじっと沈黙し、トマスにしゃべりたいだけしゃべらせた後に、「うちで出します」という結論を!

本作冒頭では、この返事に有頂天になって廊下に出た後、思わず奇声をあげるトマスの姿に注目。さらにトマスの愛人で、年上のパトロン女性アリーン・バーンスタイン(ニコール・キッドマン)の家に帰った後、「君のおかげだ!」と興奮しながらアリーンの身体を乱暴に求めていくトマスの姿に注目したい。なるほど、誰にでもこんな時期、こんな瞬間があるわけだ。それをジュード・ロウが見事に演じているので、その演技にも注目!

■削除!削除!それが編集者の仕事!■

私は都市問題をライフワークとし、都市計画関係の本をたくさん書いてきたが、出版社や担当者との間で出版のテーマ、狙い、大まかなページ数、目次、「ですます調」か「である調」かのスタイル等々が決まると、私はほぼ自分の思い通りに書き、編集者(出版社)から修正を受けることはほとんどなかった。まして、自分の書いた原稿の「ここを削除しろ」と言われたことはほとんどなかった。しかし、本作で作家のトマスと編集者のパーキンズの仕事ぶりを見ると、その中心はパーキンズからトマスへの「これも削除!あれも削除!」の命令(アドバイス?)になるから、それに注目!

トマスの処女作『失われしもの』は自伝的小説だが、ものすごいボリュームだった。したがって、「読者に売れる本」を出版することに最大の価値を置く編集者のパーキンズには、そのストーリーの軸をシンプルにすること、トマス特有の饒舌な修飾語を削除することが至上命令になったのは当然だ。本作は全編においてトマスの原作が朗読されるし、「削除!」

の過程でどのように書かれていた元原稿がどのように削除されていくかが明らかになるので、日夜「都市問題関連本」や「映画関連本」の原稿書きをしている私には興味深い。トマスが言うように、いくら膨大でもその一文字、一フレーズはすべて自分の心の内から絞り出したものだから、いくら信頼する編集者だと言ってもそれが「削除！」の一言で日の目を見なくなるのは耐えられないものだ。

ところが「削除！」をめぐるトマスとパーキンズの「格闘」を見てみると、多くの場面でトマスがパーキンズに従っていることがよくわかる。これは、出版してもらうためにはやむをえないという「譲歩」の面はあるものの、削除の結果短くなった文章がシンプルでわかりやすいと納得しているためだ。そのことが見えてくると、トマスとパーキンズの間には、作家と編集者という枠を超えて、息子と父親のような信頼関係が生まれてくることに……。

■□■「パトロン本能」は女にも……■□■

若い男の才能を見出し、それを守り発展させていく楽しみ。それが「パトロン本能」というものだ。それを仕事としていた(?)パーキンズは、トマスの前にも出版社のお偉方を説得して当時無名だったF・スコット・フィッツジェラルドの小説『楽園のこちら側』を出版して新しい時代の到来とセンセーショナルを巻き起こし、続いてアーネスト・ヘミングウェイの才能も見出ししていたから、トマスは彼のパトロン本能を刺激する3番目の格好のターゲットになった。本作に登場するF・スコット・フィッツジェラルド(ガイ・ピアース)もアーネスト・ヘミングウェイ(ドミニク・ウェスト)も天才作家特有の「ケツタイな奴」だったようだが、本作の一方の主人公となるトマスはそれ以上のケツタイな奴であることがわかるので、本作ではそれを十分に味わいたい。

他方、才能ある若い男を庇護したいという「パトロン本能」が発揮されるのは、パーキンズのように仕事上の要請と個人的趣味が合致した場合(?)だけではなく、知力と財力があり、その男の才能に母性本能をくすぐられた場合も、その男の面倒を見るべく飛び込んでいくという形で発揮されるらしい。トマスの場合は、ウォール街で株のブローカーとして働く夫と娘と息子がいた女性アリーンがそれだった。1925年にオリンピック号の船上でトマスとはじめて出会ったとき、アリーンは42歳、トマスは24歳だったが、それ以降アリーンは夫と子供たちを捨て、トマスの衣食住を全面的に援助したというから、そのパトロン本能の発露はすごい。もっとも、それが行き過ぎると新たな問題が次々と……。

■□■こちらの成功が、あちらの破綻に! ■□■

『ALWAYS 三丁目の夕日』(05年)、『シネマルーム9』258頁参照)では、吉岡秀隆演じる売れない小説家・茶川竜之介の執筆活動を、向かいに住む鈴木オートの社長や近所の人たちが温かく見守っていたが、アリーンのトマスに対する支援はそれとは質量

ともに比べ物にならないものだった。したがって、スクリプナーズ出版社のパーキンズからトマスの処女作を出版すると確約を得たとのトマスからの報告を聞いた時、アリーンはトマスとともに喜び幸福の絶頂だったが、同時にパーキンズのような「対抗馬」が登場すると、それ以降始まったアリーンの苦しみ、苦悩とは・・・？

男でも女でも、物に対する独占欲だけではなく、人間に対しても「独占欲」があるもので、場合によればそれが「嫉妬心」を生むことになる。そして、アリーンの場合はそれが極端だったらしい。本作でのアリーンの出番は多くはないが、それぞれインパクトを与える強烈なシーンでの登場となるので、その姿に注目！

アメリカは今でも誰もが自由に銃を持てる銃社会だが、1920年代もそうだったことが後半のあるシーンで明確に印象づけられるので、とりわけそれに注目！それにしても、ハンドバッグから銃を取り出したアリーンから「誰を撃つか決められない」「トマスか私かあなたか？」と面と向かって言われたら、パーキンズはどう答えればいいの？そんな、かなりバカげているとはいえ、迫力あるシーンに注目！

■□■音楽にも文学にも一発屋がいっぱい！■□■

小説や映画は発表される数が知れているが、歌はその数が多いため1つの曲が大ヒットしても「一発屋」で終わるケースも多い。少し思い返しただけでも、『あなたのキスを数えましょう』の小柳ゆきや、『トイレの神様』の植村花菜等の名前がすぐに思い浮かんでくる。ちなみに、安室奈美恵はすでに過去の歌手とされていたが、2016年夏のリオデジャネイロオリンピックのNHK放送テーマソングの『Hero』を歌い、見事に復活したのはお見事だ。トマスが持ち込んだ『失われしもの』は最終段階でトマスの発案によって『天使よ故郷を見よ』とタイトルを変えて出版され、たちまちベストセラーになった。そして同時にトマスは一躍有名人になり、印税もガッポガッポと入ってくるようになったが、問題はそこからだ。

歌の世界と同じように、文学や小説の世界でも一発屋はいっぱい！一度の成功で自分の才能に目覚めても、それがどこまでのモノか？一発目の成功は必然か偶然か？そこらあたりが微妙だ。また、世の読者が求めるものは常に変化するうえ、次から次へと新たな才能が出現してくるから、2度目、3度目の成功は1度目以上に難しい。小説の世界における人気や「民意」はつかみようがないわけだ。

■□■トマスは一発屋？難しいのは第2弾だが・・・■□■

トマスがパーキンズのもとに持ち込んだ第2作の原稿は、資料を含めてダンボール3箱分もの膨大なもの。第1弾に続いて、これについても当然「削除！削除！」の共同作業が必要となったから、こりゃ大変だ。今ならパソコンがあるが、当時はすべて読みながら書き直しながらの作業だから、よけい大変。そのうえトマスの小説はあくまで自伝的なもの

だから、一発目は物珍しさもあって読者は興味を示してくれたが、さてトマスの第2弾は？

F・スコット・フィッツジェラルドの第5作として出版された『グレート・ギャツビー』（25年）は書評では絶賛されたが本は売れず、一時的に絶版になりフィッツジェラルドはかなり苦勞したらしいことが本作でも描かれる。他方、アーネスト・ヘミングウェイは1920年代の『日はまた昇る』、『武器よさらば』で既に世界的に有名になっていたが、その後スペイン内戦に自ら参加して『誰がために鐘は鳴る』を書いたし、海への興味が一貫していた彼はその後『老人と海』を書き、この作品の評価がノーベル文学賞につながるようになった。パーキンズが手掛けたそんな同世代作家たちに比べると、トマスの第2弾は？

ちなみに、私の中学時代に、橋幸夫・舟木一夫・西郷輝彦という「御三家」の後に突如登場した三田明は日本一美しい男として『美しい十代』（63年）を大ヒットさせたが、第2弾（？）の『若い港』（64年）以降はほぼダメだった。さて、トマスの第2弾『時と川の』は？

■ 1930年代と対比したアメリカの1920年代は？ ■

アメリカの1930年代はハリウッドでの「赤狩り」を含めて陰鬱な時代、そして「誰もが腹を空かしていた時代」だった。しかし、1918年に第1次世界大戦が終わり、ヨーロッパでは敗戦国のみならず戦勝国も疲弊してしまった1920年代に、アメリカは経済的に一人勝ちとなった。そんな未曾有の好景気の中、アメリカでは人は生産者である前に消費者として生きるという現代社会の原型が成立し、消費は悪徳ではなく美德となった。そして「ジャズ・エイジ」にあっては、風俗も大きく変化し、短い髪、短いスカート、煙草をくわえた新しいタイプの女性「フラッパー」が都会に出現したらしい。

また、そうした大衆社会の出現に合わせて、文化も単に一部の金持ちが享受するものではなくなった。野球、映画、ジャズといった大衆文化が広まり、ベーブ・ルース（野球）、ルドルフ・ヴァレンチノ（映画）、チャールズ・リンドバーグ（大西洋単独横断飛行）といった大衆的英雄が出現したのもこの時代が最初だ。

そんなことが、パンフレットにある柴田元幸氏（アメリカ文学研究者・翻訳者）の「編集者パーキンズとその時代」を読めばよくわかる。

■ 編集者という職業に注目！ ■

そんな1920年代に、パーキンズはアーネスト・ヘミングウェイ、F・スコット・フィッツジェラルドそして本作のトマス・ウルフを世に送り出すカリスマ編集者になったわけだが、彼はなぜそんな職業を選んだの？ また、彼の私生活はどうだったの？

パーキンズは破滅型のトマスとは正反対で、妻と5人の娘たちを大切に作る典型的な家庭人だったらしい。パーキンズを連れて行った酒場の激しい音量の中で大声でしゃべるこ

とに全く抵抗を示さないトマス、ジャズの演奏を注文しそのリズムに酔いしれるトマス、カウンターからの流し目に素早く反応し、今夜はトコトン楽しむぞと言いながら2人の女をベッドに誘うトマス。それはパーキンズにとってはじめて見るトマスの別の顔だったが、トマスにはこのようにありとあらゆる多面的な人格があったらしい。

それに対して、パーキンズはたった1つ好きな曲をリクエストし、それがジャズ風にアレンジされ大音量で流れてくると、少しは足が反応したものの要はそれだけ。カウンターで2人の女を口説くトマスを残して一人家路に向かったが、この姿にパーキンズの間人性が如実に表れている。団塊世代の私なら、すぐにそんな世界に入り込んでトマスと共に楽しむが、パーキンズは決してそんな人間ではなかったわけだ。

本作でパーキンズを演じたコリン・ファースは『英国王のスピーチ』（10年）（『シネマールーム26』10頁参照）でアカデミー賞、ゴールデン・グローブ賞主演男優賞を受賞した名優。私が最初にその名前をインプットしたのは、『イングリッシュ・ペイシエント』（96年）（『シネマールーム1』2頁参照）と『恋におちたシェイクスピア』（98年）。近時では『裏切りのサーカス』（11年）（『シネマールーム28』114頁参照）での重厚な演技と『キングスマン』（14年）（『シネマールーム37』213頁参照）でのあつと驚くアクションが印象に残っている。そんなコリン・ファースが、本作ではとにかくしゃべりまくるジェード・ロウと好対照に、ひどく無口なそれでいて仕事には忠実で勤勉な「これぞ編集者！」という役柄を見事に演じているのでそれに注目！

なお本作のパンフレットには、1993年に角川書店を退社して幻冬舎を設立し、23年間で22冊ものミリオンセラーを世に送り出した日本の「カリスマ編集者」である見城徹氏（幻冬舎 代表取締役社長）の「魂をすり減らし、傷つけ合う<本当の関係>」と題する「Review」があるが、本作を鑑賞するについてこれは必読！弁護士も大変な仕事だが、編集者はそれ以上に大変な仕事だということがよくわかる。もっとも、1950年生まれで私と同じ団塊世代である見城氏なら、本作のあの酒場ではきっと私と同じようにトマスと一緒に楽しんだと思うのだが・・・。

■□■仲間割れ？ケンカ別れ？それとも・・・？■□■

1つの成功が生まれても、それが永遠に続くわけではないのは世の常だ。王、長嶋を要し、川上監督が率いた読売巨人軍は1965年～1973年までV9を果たしたが、それが限度だった。人間は誰でも絶頂期があれば、衰退期があるものだ。昨年9月に直腸ガンの手術をした67歳の私は現在そんなことをいつも考えている。しかし、大相撲やプロ野球等のスポーツと違って、真の才能さえあれば歌の世界や小説の世界は長く続くもの。歌の世界では北島三郎、五木ひろし等、小説の世界では司馬遼太郎、石原慎太郎、五木寛之等を見ればそれがよくわかる。そう考えると、第2弾『時と川の』も大ヒットしたトマスの場合は書くネタはまだ山ほどあったから、次々とベストセラーを・・・。誰もがそ

う思うところだが、本作後半からはトマスとパーキンズとの間に吹き始める秋風に注目！

「私だけのトマスをパーキンズに奪われた！」と感じてしまうアリーが、トマスやパーキンズに見せるエキセントリックな言動には「いやはや・・・」と思ってしまうし、こんな女と親しく付き合わなければならぬ大変さにもうんざりさせられてしまう。したがって、彼女の口から「いずれ二人は別れてしまうことになる」と言われても、「あ、そう」と聞き流すことができたが、ヘミングウェイの口から「トマスは君を離れる」と言われると、さてパーキンズの心境は・・・？

そんな風に思っていると、本作では意外にあっけない幕切れがやってくるのでそれに注目！これでは映画のクライマックスとしての盛り上がりはイマイチだが、パンフのラストに全文が掲げられている「親愛なるマックス」と題されたトマスからの短い手紙の朗読は、いかに2人が強い友情で結ばれていたかを明確に見せてくれる。脳の中が腫瘍だらけで手の施しようがないところまで進んでいたトマスが、いつどこでこの手紙を書いたのかは不明だが、3年間にわたる（3年間だけの期間限定の）作家と編集者の友情をしっかりと噛みしめたい。地味な映画だから大ヒットするとは思えないが、日々原稿書きばかりしている私にはとりわけ心に残る作品だった。

2016（平成28）年10月20日記